コミュニケーションにおける「気」
——日本人をとりまく間柄——
Ki in Communication:
Interrelations Surrounding Japanese

瀬端 睦
Mutsumi SEBATA

Abstract: What is *ki*? This question has troubled many scholars to date and no one has found a final answer. This paper tackles this longstanding question from the perspective of intercultural communication. Issues concerning *ki* in Japan, especially, expressions like *ki-kubari* or *ki-zukai*, are mainly concerned with "attention to others", which are certainly issues of intercultural communication. However, almost no academic research in the area of Intercultural Communication has dealt with issues of *ki*. Most of the studies on *ki* have been conducted in other disciplines such as philosophy, medicine, or linguistics. Besides, those researches are mainly concerned with the Chinese concept of *ch'i*, which in fact, is quite distant from *ki* in Japanese everyday-life communication. *Ki* is the Japanese version of *ch'i* and originates from ancient China, but Japanese *ki* differs from Chinese *ch'i* (as well as Korean *ki*), as *ch'i* in China has changed diachronically. This paper is based on such distinctions and focuses on *ki* in Japanese everyday-life communication so as to study *ki* not only on a conceptual level but also on a pragmatic level. People live their everyday life in their everyday world, not in a conceptual world. The paper begins with the fact that Japanese language has thousands of words and expressions which include *ki*, such as *ki o tsukau*, *ki ga au*, and so on. Such expressions in novels and how-to books are collected and analyzed in this paper. After the linguistic analysis, verbal and nonverbal expressions of *ki* in interaction are scrutinized by analyzing videotapes. Finally, people's feelings concerning *ki* are analyzed with data from interviews. As a result, it is shown that *ki* in communication has

partly undergone a diachronic change, and implications for how Japanese people now comprehend *ki* in communication are discussed.

1. はじめに

世界で、人びとは日々目覚め、朝食を食べ、電車に乗り、会社へ行く。あるいは、学校に行く。そうしたあたりまえの日常に囲まれながら、人は生きている。たとえば、上司に失礼のないように日々気を使う。全員に飲み物が行き渡るように気を配る。あたりまえの日常は、しかしながら、何時でも何処でも「あたりまえ」のことだとは限らない。飲み物を配る行為が「あたりまえの気配り」であることもあれば、まったくあたりまえでない場合もある。そうした差異は「気が利かない奴だ」といった感情のぶつかり合いにも発展しうる。感情を非合理的なものとして切り捨ててきた歴史があるが（藤田，2007）、日常生活においては、論理的齟齬よりもむしろ感情的齟齬のほうが対人関係の亀裂を深くさせる場合があるのである。人が日常を生きていくことと感情は切り離すことができない。本稿は、そうした感情を含めた、日常の「あたりまえ」のコミュニケーションの差異、あるいは、他者との出会いを分析することで、人びとの「気」をめぐる「生」を見つめ直す試みである。

「気」は中国起源の思想であるが、朝鮮、日本へと伝えられ、それぞれの文化で独自の変化を遂げた[1]。中国では現在、「気」を「万物を構成する最小の物質的単位」としてとらえる傾向にある。一方、韓国では、「気」が「くすしき聖なる力」をあらわしたり、「万物の質的根拠」として考えられたりする。また、現在の日本においては、「気を配る」や「気を使う」などの対人関係における「気」表現がきわめて多いことに象徴されるように、「気」の精神面が強調される（前林ほか，2000; 小野沢ほか，1978）。そうした「気配り」や「気遣い」は主に「対人的な注意の働かせ方」（濱野，1987, p. 300）に関するものであり、コミュニケーションの問題にほかならない。しかしながら、「気」の研究は主に哲学・医学・言語学などの分野で行われてきており、実際のコミュニケーションにおける「気」の学術的研究はほとんどなされてこなかった。そこで、本稿では、人びとの日常のコミュニケーションにおける「気」について、異文化コミュニケーション学の見地から探究していく。

上述のように、日本・中国・韓国における「気」は現在、それぞれ異なるものとなっているが、そうした共時的差異とともに通時的差異も認められる。古代中国における「気」と現代中国における「気」は異なっており（小野沢ほか，1978）、同様のことは日本・韓国についてもいえるだろう（前林ほか，2000）。たとえば古代日本における「気」の概念、宋儒学・朱子学における「気」の概念、理気二元論、伊藤仁斎の「一元気」の概念（土屋，2004）などと、現在の日本人の日常的コミュニケーションにおける「気」には隔たりがあると考えられる。本稿では、そうした種々の乖離、差異の多様性をふまえたうえで、近現代日本で行われている日常のコミュニケーションにおける「気」の今ここの現実をまず明らかにすることに焦点をおき、「気」に関する多様な言説を記述することを主な目的とする。以下では、まず、「気」に関する先行研究にふれ、研究方法について述べたのち、実際に行った調査の分析・考察を行う。

2. 先行研究

(1) 「気」に関する研究

「気」に関する研究はさまざまな分野で行われているが、以下の五つに大別できるように思われる。1) 中国起源の思想展開についての研究、2) 文化論の類、3) 言語学的研究、4) 東洋医学における研究、また、ほとんどなされてはいないが、5) コミュニケーション研究である。

思想の展開の研究では、日本・中国・韓国においてそれぞれの流れが存在しており、また互いが与え合ってきた影響についても述べられている（小野沢ほか, 1978; 前林ほか, 2000）。文化論の類では、日本に関するものや（赤塚, 1990, 1996; 土居, 2007; 山本, 1997）韓国に関するものがあるが（小倉, 1998, 2001）、「気」ということばの存在が文化の存在に結びつけられて述べられるのが特徴である。言語学的研究では、「気」一語を歴史的に研究したもの（佐藤, 1996）や韓国語と日本語の比較対照研究（鄭, 1996）、「ポライトネス」と「配慮表現」の関わりや日中比較対照研究を行ったもの（彭, 1996, 2004）などがある。また、Hasada (2002) では身体部位表現の一つとして「気」がとりあげられている。概して、言語学では「気」の「意味」に関する研究が中心である。東洋医学の研究では、人体内部、あるいは、人体外部に流れるエネルギーとしての「気」を脳波・赤外線・電磁波・超低周波などの測定によって科学的、実証的に研究する試みがなされている（湯浅, 1991）。コミュニケーションにおける研究は、ほとんど行われておらず、部分的に扱った研究や（Rosenberger, 1992, 1994; Nagata, 2002; Borovy, 2005）、理論的モデルを提示している研究（Chung ほか, 2003; 濱野, 2003）があるのみである。

以上で述べたように、コミュニケーションにおける「気」の学術的研究はほとんどなされていないに等しいが、日本における「気配り」や「気遣い」は主に「対人的な注意の働かせ方」（濱野, 1987, p. 300）に関するものであり、コミュニケーションの問題にほかならない。思想・言語・身体・感情などのさまざまなコンテクストが互いに絡み合うことによって一つの「生」としてコミュニケーションは成り立っているはずであり、人びとの日々の営みに沿ったかたちで、多面的に「気」を研究する必要があるだろう。

(2) 「気」と「心」の定義

「心はどこにあるか」と誰かが問う。「グラス」という単語が対象としてさす透明な筒状の物体があるように、「本」という幾重にも紙が重なった四角い対象物があるように、「心」ということばがさし示す対象があるのか。「心」がさしているものは一体何か。同様の問いは「気」に関してもありえるだろう。「気」は何か。「気」は存在するのか。「気」はどこにあるのか。そうした目に見えない不可解な存在としてある「心」と「気」について、さまざまな人が定義を試みてきた。赤塚（1996, p. 9）は、「心」は本来内に向かって閉ざされているものであるのに対し、「気」は外に向かって一種の見えない触手のように絶えず動いているものであると述べる。また、彭（2004, p. 579）は「心」を論理的思考や内在的な精神活動であるとし、「気」を感覚的に感じられることとしている。一方、土居（2007, p. 152）は「気」を「瞬間瞬間における精神の動き」であるとする。

ここで問題になっているのは「気は実在か、概念か」である。気は経験的な性格の強い概念的なものと考えられるので、実在であるとも概念であるともいえる。その両方であるということもできる。気がその両極のどちらかに属すか、あるいは、中間のどの位置を占めるか、を決めなけ

れば研究を始めることさえできないことになる。したがって、そうした困難な問題を避けるため、上述したように、言語学では「意味」の領域に絞って研究がなされ、東洋医学では「エネルギー」の流れに絞って研究が行われてきたのだろう。

しかしながら、クルター（Coulter, 1979）[2]が述べているように、まったく別の仕方で「心」について考えることができる。われわれは日常生活において「心はこれこれである」と定義することなくして、「心の中で思っていることを言えなかった」、「心が晴れ晴れとしている」などの表現を使っている。思っていることを入れておく心と、晴れ晴れとする心とを一様に定義づけることをわれわれはしていない。言語習得の過程で「心」の使用は十全な仕方で手に入れられており、何の不自由もない。「心」について知るためにやらなければならないことは、「心」の核となる定義を見つけることではなく、むしろ「心」が日常においてどのように使われているか、どのような事柄やコンテクストと結びついて用いられているか、を明らかにすることである。「心」は日常生活の相互行為の中で組織されているのである。

「気」についても同様のことがいえるだろう。「気」は何か。「気」は存在するのか。「気」はどこにあるのか。それらを問う前に、日本語の話者は「気」を含んだ表現を日常生活にまったく支障のない仕方で用いることができる。「気が利く人だ」、「気を使わないで」といった表現を何気ない日常の中で、日々使っている。「心」が日常の相互行為の中で組織されているように、「気」もまたわれわれの日常の中で組織されている。「気が利く」「気を使う」「気を配る」、そうした表現がどのような事柄、コンテクストと結びついて用いられているか、そのことを探究することによってこそ「気」が何であるかが明らかになると考えるので、初めから「気」を定義づけることはしない。

3. 研究方法

「気」に関する言語表現、実際の相互行為、感情について、「対人的な注意の働かせ方」に焦点をあてて調査するため、書籍、ビデオ資料、インタビュー資料を分析した。書籍の調査では、『青空文庫』（2008）と『新潮文庫の100冊：CD－ROM版』（赤川ほか，1995）に収められている小説を検索した。『青空文庫』は著作権の切れた小説を載せているウェブサイトであり、『新潮文庫の100冊：CD－ROM版』（以下、『新潮文庫』）は新潮文庫として出版されている著名な小説100冊を収めた一枚のCD－ROMである。検索した文字列は「気が（の）利く・気を利かす・気を配る・気配り・気を使(遣う)・気遣(使)う[3]・気遣(使)い[4]・気が（の）付く[5]・気を回す」とその文字列の「気」以外を平仮名にしたもの、および、活用形である。『青空文庫』と『新潮文庫』では媒体が異なるので、検索方法は異なっている。前者については、『青空文庫』の小説で「著作権に問題がなく、現代語で書かれた日本人作家の文章（散文）」（杉村，2007, p. 48）がウェブサイト『茶漉』で検索できるようになっているので、それを利用した。『新潮文庫』に関しては、CD－ROM内の検索機能を使い、日本人作家によって書かれた小説67冊のみを対象とし、1冊ずつ検索していった。参考資料として、『「気がきく」女になれる50のルール』（浦野，2005）といったマニュアル本26冊も参照した。

ビデオ資料の分析では、日本人が食事をしている場面を実際に撮影したものを用いた。撮影は2007年8～9月に3回、それぞれ3、4時間程度行い、撮影中、著者はインフォーマントと共に食事をしながら過ごした。撮影の概要は以下である。

① 女性１人、男性１人＋著者　（場所：居酒屋）
② 女性３人＋著者　（場所：インフォーマントの家）
③ 男性３人、女性２人（うち１人中国人）＋著者　（場所：インフォーマントの家）

最後に、ビデオ撮影参加者のうち８人（男性４人、女性４人）に対し、2007年９～10月にそれぞれ約１時間程度のインタビューを行い、その語りを分析した。

4. データ分析と考察

(1) 気に関する言語表現：『青空文庫』と『新潮文庫』の比較

『青空文庫』と『新潮文庫』の小説中に出てきた「気」を含む表現の用例数とその割合（出現率）を計算して表にし、両者を比較した。『青空文庫』と『新潮文庫』では、含まれる小説が書かれた年代に違いがあったからである。『青空文庫』は著作権の切れた小説のみを載せているので、1950年以前に書かれた小説がほとんどである。一方、『新潮文庫』は幅広い年代の小説を収めているので、1950年以降の小説も含んでいる。したがって、『青空文庫』と『新潮文庫』における用例数に違いがみられれば、その違いは、小説という限られたジャンルの書記言語に関してではあるが、言語使用の通時的変化の一つと考えることができる。ほとんどの表現では変化がみられず、出現率の変化は5%以内であったが、「気を使（遣）う」と「気遣（使）い」に関してのみ、大きな変化がみられた。『青空文庫』と『新潮文庫』それぞれについて、表現の用例数が多い順に並べた表を以下に示す[6]。

『青空文庫』では「気遣い」の用例がもっとも多かったのに対し、『新潮文庫』では「気遣い」

表１．『青空文庫』の用例数

	表現	用例数	割合
1	気遣い	105	29%
2	気遣(使)う	78	21%
3	気の利く	63	17%
4	気が利く	38	10%
5	気を配る	29	8%
6	気を利かす	16	4%
7	気を使(遣)う	12	3%
8	気を回す	10	3%
9	気が(の)付く	9	2%
10	気配り	3	1%
計		363	100%

表２．『新潮文庫』の用例数

	表現	用例数	割合
1	気遣う	58	20%
2	気を使(遣)う	54	19%
3	気の利く	46	16%
4	気遣(使)い	34	11%
5	気を配る	32	11%
6	気が利く	27	9%
7	気が(の)付く	17	6%
8	気を利かす	15	5%
9	気を回す	3	1%
10	気配り	1	0%
計		286	100%

の用例が少なくなり、全体の4番目に落ち込んでいる。また、「気を使(遣)う」に関しては、その逆で、『青空文庫』では「気を使(遣)う」の用例数が少なく、全体で7番目であったのに対し、『新潮文庫』では2番目に多い表現となっている。これを通時的変化としてとらえれば、「気遣(使)い」の使用が減少傾向にあり、「気を(使)う」の使用が増加傾向にあるということになるだろう。それら二つの傾向について、以下で詳細に検討する。

1)「気遣い」の通時的変化

まず、「気遣い」の使用が減少傾向にあることの理由として「気遣い」の意味の通時的変化があげられる。以下に示すように、現在の「気遣い」の使用法とは異なる用例が多数みられた。「気配」「様子」「心配」等の意味での「気遣い」である。それぞれの例を以下であげていく。

〈気配・様子〉

・しかし妻が私を理解し得たにしたところで、この物足りなさは増すとも減る気遣(きづかい)はなかったのです。(夏目漱石『こころ』1914年初出)
・妻を詠い子を詠う歌は勿論、四季おりおりの気遣いや職務とか人事、または囚人の身の上を偲ぶ愛情の美しさなど、百三十二ほどのそれらの歌(横光利一『睡蓮』1969年初出)
・再び猫が帰ってくる気遣いなので(黒島伝治『紋』1925年初出)
・それはこういう動物の図々しいところでもある。彼らは人が危害を加える気遣いがないと落ち着き払って少しぐらい追ってもなかなか逃げ出さない。(梶井基次郎『交尾』1931年初出)

以上の例では、上から順に、事柄、自然、動物、人の「気配・様子」をあらわすのに「気遣い」ということばが用いられている。

〈心配〉

・おれの身より、おれが護衛している荷やぜにのほうが気づかいだったのであろう(司馬遼太郎『国盗り物語』1971年初出[強調原文])
・一度死んでしまえば、もう死ぬ気づかいをして、右往左往することもないわけです(安部公房『砂の女』1962年初出)
・昼過ぎになっても出産の模様が見えないで、産婆や看護婦の顔に私だけに見える気遣いの色が見え出すと、私は全く慌ててしまっていた。(有島武郎『小さき者へ』1955年初出)

以上の例では、語り手や看護婦など、人がある事柄を心配する気持ち、あるいは、人の不安な気持ちが「気遣い」ということばであらわされている。

〈〜はずはない[7]〉

・私の衣食の口、そんなものに就いて先生が手紙を寄こす気遣いはないと、私は初手から信じていた。(夏目漱石『こころ』1914年初出)
・「嘘吐き」と云いました。青眼先生はハッと驚いて背後をふり向きますと、うしろにはたった今検めた馬丁の死骸があるばかりで、しかも手も足もバラバラになっているのですから、口を利く気遣いはありませぬ。先生は大方耳の迷いだろうと思って(夢野久作『白髪小僧』1922年初出)

・呼び鈴のつもりなんでしょうけれども、あれは電灯のスイッチなんですもの。誰も来る気遣いはないわ。（甲賀三郎『ニッケルの文鎮』1926年初出）

以上の例では、「ある事柄が起こるはずはない」あるいは「人がある事をするはずはない」の意味で「気遣いがない」が使われている。

上記にあげたような「気配・様子」「心配」「～はず」の意味では、「気遣い」はもはや用いられなくなっている。そうした使用範囲の縮小の結果、「気遣い」の使用頻度が減少したのであろう。参考のために「気配」の用例を調べてみたところ、『青空文庫』では104件、『新潮文庫』では398件あり、「気配」の使用が増加していた。以前は「気遣い」でも言いあらわされていた状態が「気配」のみで言いあらわされるようになったので、「気配」の用例が多くなり、その分「気遣い」の用例が減ったということであろう。

一方、上記のような用法とは違い、現在、一般的にみられる「気遣い」の用法の例としてはつぎのようなものがあげられる。

〈現在の用法〉

・そうおっしゃって頂くお気遣いは、とても嬉しゅうございますわ。（田辺聖子『新源氏物語』1978年初出）

・志方は自分の竹筒から水をとって吟子にさし出した。志方の気遣いが吟子には痛いほどよく分かった。（渡辺淳一『花埋み』1970年初出）

以上の例におけるような、「人のことを慮る」「人のために何かをする」あるいは、「人間関係に配慮する」などの意味の「気遣い」が現在の一般的用法であろう。このように「気遣い」の意味は通時的に変遷してきたと考えられるが、その単語の意味変化は「気遣いがある／ない」という表現の意味変化をももたらしているようである。小説中で非常に多く見られた「気遣いがある／ない」のほとんどは「気配がある／ない」「心配（ない）」「～はずはない」の意味であった。しかしながら、現在では「気遣いがある／ない」はつぎのような意味で用いられる。

・人づき合い上手な人になるには秘訣があるのです。それは「気遣いのある」人と認められるようになることです。（山田，2003, p. 4）

ここでの「気遣いのある」は、「配慮ができる」「思いやりがある」といった評価を示す表現である。そうした評価をあらわす「気遣い」が、現在では日常的に使われている。たとえば、以下のような例である。

・身内に対しても、そうした気遣いができる女性になっていただきたいものです。（浦野，2005, p. 4）

こうした「気遣いができる／できない」といった表現は調査した小説中には見られず、最近使われるようになってきた表現であると考えられる。

以上のことから、小説というジャンルの書記言語において、「気遣い」は「気配」「様子」「心配」「～はず」などの幅広い意味をもっていたが、次第に「人を慮る」「人のために何かをする」「人

間関係に配慮する」などの限られた意味へと変化してきたことがわかる。そうした通時的変化の結果、「気遣い」の使用頻度の減少、そして、「気遣いができる／できない」という表現の出現がもたらされたのである。

2)「気を使う」の使用増加

「気を使（遣）う」の使用増加に関しては、「私（彼・彼女）が気を使う」のように、その主語のほとんどが人間であることに注目する必要があるだろう。動物や植物を擬人化して、「気を使っている」と比喩的に表現することは考えられるが、「様子」や「気配」の意味で用いられていた植物や動物の「気遣い」の使用法と比べれば、その数は圧倒的に少ないと考えられる。現在の「人を慮る」や「人を喜ばす」意味の「気遣い」も圧倒的多数で人間にあてはまるものである。「気を使う」の使用増加、また、「気遣い」の意味変化から示唆されるのは、「気」の焦点が事柄・植物・動物から人間に移ってきたのではないか、ということである。

「気を使う」と「気を遣う」の違いについても考える必要があるだろう。『広辞苑』（新村, 1998）の「使う・遣う」の項目の最後には、つぎのような注記が付されている。「広く一般には『使』を用いる。心をあれこれ働かせる、技や術を巧みに操る意のとき『遣』も用いるが、動詞形では、『気遣う』以外は『使』がふつうになっている」。現在、「つかう」の漢字としては「遣う」ではなく、「使う」が一般的に用いられるということである。「気づかい」「気づかう」に関しては「遣」が用いられるが、「気をつかう」等のその他の多くの表現では「使」を用いるのがふつうである。また、『広辞苑』（同上）によれば、「使」は「使用する」「操作する」の意味が主であるのに対し、「遣」は「遣る」「遣わす」等の「他方へ行かせる」「送る」意味も含むこともわかる。「気を遣う」には「気」を「他方へ行かせる」「送る」意味合いがあるのに対し、「気を使う」では「気」を「使用する」「操作する」意味が中心になるということである。

「気配・様子」「心配」「～はず」などの意味で用いられていた「気遣い」に関しても同様に考えれば、昔の「気遣い」は「気」の「遣り様」を表現していたのではないかと推察される。植物や動物、事柄、人間の「気」が外にあらわれる様である。昔、植物、動物、事柄、人間の「気」が外にあらわれ出る様子を人びとは感じとり、あるいは、想像し、表現していた。その「気」の「遣り様」が中立の状態であれば「気配・様子」、マイナスの方向のものであれば「心配」、未来に向かうものであれば「～はず」の意味であったと考えられる。しかしながら、そうした「気遣い」の意味は次第に薄れ、人間が「気」を「使って」、つまり「用いて」、人のために何かを行うことが「気遣い」とされるようになってきたのではないだろうか。そのことからも、人間が中心に据えられるようになってきていることがうかがえる。

彭（2004, p. 594）の「気を配る」と「気を遣う」の違いに関する記述も参考になる。彭（同上）は「気を遣わないでください」と言うことはできるが、「*気を配らないでください」とは言えないことを例にあげ、「気を配る」は「他人によい気持ち（利益）を与えるようにする、喜ばせる」の意味が強いのに対し、「気を遣う」は「神経を遣う」の意味が強いとしている。つまり、「気を遣う」には「気を配る」とは異なり、マイナス要素の含みがあるということだろう。そうしたマイナスの意味合いをもつ「気を使う」の使用増加から考えられるのは、人びとが「気」のマイナス要素をより意識するようになってきたのではないか、ということである。

以上で、「気を使う」の使用増加を「気遣い」の意味の通時的変化と合わせて検討してきた。「気」の焦点が動物・事柄・植物から人間に移ってきており、「気」を内から外にあらわれ出るものとしてよりも、「使用する」もの「操作する」ものとしてとらえるようになってきたことが示唆さ

れた。また、現在、人びとは「気を使う」ことのマイナス要素を多分に意識している状態であろうことも推察される。「気遣いができる／できない」といった評価を表す使用法の始まりや『「気が利く」女になれる50のルール』（浦野，2005）といったマニュアル本が大量出版されている状況も、そうした人びとの思い、「気遣いができるかどうか」で評価される状況を負担に感じていることのあらわれなのかもしれない。

(2) 「気」に関する相互行為：ビデオ分析

ビデオ分析では「渡す」行為に注目した。渡す行為が達成される過程を考えると、何かを渡すためには、まず、それを「差し出す」必要がある。何かを差し出すためには、まずそれを「手に取る」必要がある。何かを手に取るためには、立ったり、取りに行ったりして「移動」しなければならない場合がある。そして、手に取ったり、移動したりする行為の前に、何よりもまず、状況を「見る」必要がある。状況を見て、何かを手に取り、それを誰かにさし出し、さし出された相手がそれを受け取ってくれること。そうした段階を経てようやく「渡す」行為が成立する。この行為の一連の流れは、見方を変えれば「動き」の範囲が拡大していくことでもある。目から手へ、手から物へ、物から人へ、人から環境へと徐々に身体の動きの範囲は広がっていく。そうした動きの範囲の拡大をともなう「渡す」行為は、「気」が内から外へとあらわれ出て行く過程と重なるところがあるように思われる。

上述のような、動きの範囲の拡大過程をともなう「渡す」行為を、目の動き、手の動き、身体の動きに注目して分析していくと、たとえばつぎのようなやりとりが見られる。

↓HがEにお澄ましを渡す
01　E：　す，すいません
↓HがOにお澄ましを渡す
02　O：　あ，ありがとう
03　H：　気を使わないと
04　皆：　ｈｈｈｈｈｈ
05　O：　俺に気使ってもなんもいいことないよ

このやりとりは研究方法の③の撮影時で、インフォーマントの家での合宿に6人が集まり、夕食を食べているときに行われたものである。Hさん（日本人男性）とEさん（中国人女性）、HさんとOさん（日本人男性）は友人であるが、EさんとOさんは初対面である。HさんとOさんの双方が3行目、5行目で、渡す行為を「気を使って」いる行為として言及しており、「渡す」行為と「気を使う」行為との関連が認められる。一方、気遣いができていないことに言及しているのはつぎのやりとりである。

01　S：　Aなんてさ：，ねえ，親子丼一人で食っちゃって
02　　さｈｈｈどこｈどこが気遣いなんだよ
03　A：　だって，だって知らなかったもん
04　S：　だから：，ふつうね．そ，そういうのね，見るよ
05　　ね．見て，ね．「あ，食べてないな」とか
06　A：　食べてあったかと思ったじゃん

07 S： だ- ふつうは見て
08 A： な，見たってわかんないじゃん
09 S： 俺だってわかってるじゃん．ちゃんと
10 A： あんたがだから
11 S： 俺ゆったじゃんね？「食べてないよね？」って
12 A： え，じゃ，あてずっぽうだったよ
13 S： それが気遣いだよ

このやりとりは研究方法の①の撮影時のものであり、Aさん（女性）とSさん（男性）は高校の同級生である。Aさんがほかの人に親子丼を取り分けず、自分一人で食べてしまった行為、つまり、親子丼を「渡さなかった」行為が1行目で「気遣いができない」こととして言及されている。ここにおいても、「渡す」行為と「気遣い」との関連が認められる。また、このやりとりにおいては、「見ない」ことに対する制裁が加えられており、SさんのAさんに対する否定的な評価がなされている場面でもある。相手を見ることによって、相手の様子や気配、気持ち、つまり、昔の意味の「気遣い」に気づくことが「気遣いができる」人には必要なのである。

「見る」ことから「動く」ことへの移行が「気遣いができる」ためには時として必要なことになるが、その必然的に連続していない二つの行為を行うのは簡単なことではない。というのも、「気遣いがある」行為を達成するにはさり気なく動く必要があるが、「さり気なく」することと「動く」ことは相反するような行為だからである。「気遣いのある」行為を達成するには、この相反する二つの行為を同時に行う必要がある。ここに、人びとの葛藤がある。その葛藤が「気を使う」ことのマイナス要素へとつながってもいるのだろう。

(3) 「気」に関する感情：インタビュー分析

感情に関する研究では、社会と感情の関わりを探究する感情社会学と個人の内面を探究する心理学が主にあげられるが、最近では学際的な研究をめざし、感情研究を包括して「感情科学(affective science)」（藤田，2007）と名づける試みもなされている。

脳神経学者のダマシオ(Damasio, 1994)は感情と身体の関わりを研究し、ある強烈な感情を経験したあと、同じような出来事に人が接したときに繰り返し思い起こされ、意志決定や選択に影響を及ぼす直感を「ソーマティック・マーカー（somatic marker)」と表現した。そう呼ばれるのは、その感情がかすかな不快感を体に感じるといった「体の状態（somatic state)」に関連するものであり、また、ある選択肢や選択と共起するイメージに「しるし（mark)」をつけることになるからである。「気が利く」行為には人びとが「動く」ことが関連するため、インフォーマントもソーマティック・マーカーに関すると思われる出来事を幾度となく語った。たとえば、先の親子丼についてのやりとりで非難されていたAさんは気を使うことについて、つぎのように語っている。

A：小中学校とか，（　　）の時とかはマイペースの人とかに振り回されてすごく我慢をしていたの．すごく気を使っていたというか．(...) だけど，それからみんなが，なんかその女も男も，え：：とね，あいつは本性見せない奴だって言われて，いい子ぶってるって，す：：ごいもうなっちゃって。

彼女は幼いころは周りに気を使って、いじめられている子を守ったりもしていた。しかし、そうした彼女の行為は「本性を見せない」と批判され、周りから嫌われることになる。そして、以下のような思いに至る。

A：馬鹿馬鹿しくなっちゃって，高校になってから，あ，もう本性出そうかなって思って，この人たちの時（(高校時代)）にね，そういう自分が出た．だからなんか，だから悪い自分どんどん見せていこうって，そん時言われたせいもあったかもしんないね．20パーぐらい．（...）天真爛漫つ：か，ま，マイペースで行ったほうがいいのかな，人生．みたいな。

「親子丼を取り分けない」行為をする現在の彼女の姿はそうした経験を経たゆえのものなのである。そのたった一つの行為にも、彼女の痛みの記憶がおそらく影響を与えている。その場での行為だけを見て、「気遣いができない」と一概に非難することはできない。この語りは、竹内（1996, p. 114）の言うように、彼女が「べろりと剥け」た瞬間であったようにも思われる。中国人留学生が以下のように語った時も同じである。

E：親しくなった日本人の友達，お前はこう，場，場の雰囲気読めない，ことがあるって。

これは「気遣いができない」と非難されたということである。異文化の孤独のなかで、このように排除される経験をすることの重さは計り知れない。そうした痛みの経験を経て、彼女は「空気を読める」よう努力をし始めたのである。このように、人にはそれぞれの経験があり、痛みの経験の記憶がある。そうしたことの積み重ねから、現在の行為に至っている。人と実りあるコミュニケーションをしようとするなら、その人の人生に起きた出来事を無視することはできない。とくに、それが痛みの記憶として残っている場合には。

以上で見てきたように、Aさんにとっても、中国人のBさんにとっても、「気を使う」ことには痛みの記憶がともなっている。一方は、気を使いすぎたことの、他方は、気を使えなかったことの。いずれにせよ、二人にとっては、気を使うことがマイナスの要素をともなう。それは二人に限ったことでは決してなく、「気を使う」ことに疲れを感じる、あるいは、負担を感じると全員のインフォーマントが語っていた。

5. おわりに

近現代日本で行われている日常のコミュニケーションにおける「気」に関して、言語表現、相互行為、語りを分析・考察してきた。言語表現の分析では、小説というジャンルの書記言語においてではあるが、「気配・様子」「心配」「〜はず」などの幅広い意味をもっていた「気遣い」の意味範囲が限定されたものへと変化してきており、そうした通時的変化から「気遣い」の使用頻度が減ってきていることが認められた。一方、「気を使う」の使用が増加しており、「気」が内から外へあらわれ出るものから「使用する」「操作する」ものへと変わり、また、「気」の焦点が事柄・植物・動物から人間に移ってきている傾向も示唆された。相互行為の分析においては、「渡す」行為と「気遣いのある」行為との関連が認められ、また、「気を使う」ことの難しさを前にした人びとの葛藤もうかがわれた。語りの分析においては、「気を使う」ことに関する痛みの記憶がコミュニケーション行為に影響しうることが明らかとなった。全体を通して、「気を使う」

ことのマイナス要素、「気遣い」で評価されることに疲れや負担を感じる人びとがいることも示された[8]。

そのような日本の現実のコミュニケーションをみてくると、濱野（2003）やChungほか（2003）が述べる、有機的なつながりをもたらすような緩やかな気や陰と陽の交わりによってもたらされる気の調和の実現は、非常に難しいようである。しかしながら、そうした緩やかなつながりをもたらす「気」は、たとえ実現困難であるとしても、言語的共通基盤の少ないこともある異文化コミュニケーションの大きな可能性を秘めているのではないだろうか。

本稿では、日本人のあたりまえの日常におけるコミュニケーションについて分析・考察してきたが、あたりまえの研究はあたりまえであるだけに難しい。あまりにもあたりまえのことに人は気づかないからである。あたりまえのことに気づくのは、その規範が破られたときである。和辻（1979）も、海外で、あるいは、帰国後の母国で抱いた違和感をもとに『風土』を著した。納富（1999）が「自己了解」ということばで述べるように、日本を離れてさまざまな風土、異なる他者と出会うことによって、自己、つまり、日本人の風土的特殊性、あるいは、「間柄」という人間関係を見つめ直すことになった。本稿においても、日本人同士であっても自己と他者とのコミュニケーションの困難に直面する現実、自己と他者の間柄からあらわれてくる日本人の姿、を描こうと試みたのである。そうした自己と他者のコミュニケーションの不可能性、自己の論理空間に翻訳できない他者（野矢，2005）に直面することからしか、異文化コミュニケーション学はおそらく始まらないのだろう。そして、その自己の論理空間を突き破って、不可能性のなかに少しでもコミュニケーションの可能性を見い出すことができるのかどうか、あるいは、見い出そうとするかどうか、それは「やみくもな希望」（野矢，2005, p. 176）にすぎないのかもしれないが、そこにこそ異文化コミュニケーションの未来が懸かっているように思われる。

《トランスクリプションに用いられている記号》

.	語尾の音が下がって区切りがついた箇所
,	音が少し下がって弾みがついている箇所
?	語尾の音が上がっている箇所
( )	聞き取り不可能な箇所
: :	直前の音が延ばされている箇所
言 -	言葉が不完全なまま途切れている箇所
(( ))	発言の要約や、その他の注記
↓□	非言語行動とその行為が開始した発話箇所を示す矢印（↓）

註

1 本稿において、「日本」「朝鮮」「中国」といったことばは、それぞれの統一的な全体を一枚岩的に措定するような仕方で用いられているのではない。日本といっても、過去から現在に至るまでのさまざまな変化があり、また、現在においても多くの差異があるのだから、その差異を抑圧して、一つの統一体として語ることは差し控えられなければならないだろう。また、それは現在と過去の差異を俯瞰するような超越的な視点をあらかじめ想定しているのでもない。酒井（2002）が述べるように、

過去についての言説も現在についての言説も歴史的限定・限界のもとにある。以上のことをふまえたうえで、「気」に関する多様性、多声性、相互の他者性を示唆するために、それらのことばを用いている。

2 このような考え方は、G. H. ミードのプラグマティズムに端を発する象徴的相互行為論や日常言語学派（Ordinary Language philosophers）に共通であろう（石井ほか，2001, pp. 100-103; Rorty, 1967）。

3 「気使う」は「気づかう」の漢字としては用いられないと思われるが、「あの人といるとほんと気つかう」というような、口語体で用いられる可能性もあるため、検索文字列に含めた。

4 「気使い」についても、「気づかい」の漢字としては用いられないと思われるが、「私、気つかいだから」のように、口語体で用いられる可能性もあるため、検索文字列に含めた。

5 本調査では、「そこに置いてある花にその時初めて気がついた」などの文に見られるような、「何かに気づく」の意味の「気が（の）付く」の例は除いてある。そうした用例のほうが「あの人は本当によく気が（の）つく人だ」などの文における、評価を示す「気が（の）付く」よりも圧倒的に多かったが、調査開始当初は「対人的な注意の働かせ方」のみに焦点をあてていたため、後者のみが表に含まれている。「気付く」に関しては、今後、引きつづき調査を行っていきたい。

6 表作成にあたっては、「気遣いする」は「気遣い」の項目に、「気遣わしい」や「気遣わしげ」は「気遣う」の項目に分類した。

7 「～はずはない」の用例にはつぎのようなものも含まれる。「この国第一の名馬『瞬』が夢中になって駈け始めたのですから、迚(とて)も人間の足の力では追い附く気遣いはありませぬ」（夢野久作『白髪小僧』1922 年初出）。「追いつくはずはない」との意味で解釈可能だが、「追いつくことはできない」という「可能」の意味が含まれている可能性もある。しかし、そうした用例は数例しか見つからなかったため、多数の用例がある「～はずはない」に分類した。

8 先にも述べたように、以上の分析・考察は、近現代日本で行われている日常のコミュニケーションにおける「気」の今ここの現実という、限られた範囲内でのものであり、より広範な歴史的視座を考慮に入れた分析・考察は今後の課題としたい。

参考文献

赤川次郎・阿川弘之・芥川龍之介・安部公房・有島武郎・有吉佐和子ほか（1995）．『新潮文庫の 100 冊 — CD－ROM 版』新潮社.

赤塚行雄（1990）．『「気」の文化論』創拓社.

赤塚行雄（1996）．「日本における『気』の歴史—文芸学的な一考察として」『日本語学』第 15 号, 9-19 頁.

青空文庫（2008）．「青空文庫」2008 年 1 月 11 日 http://www.aozora.gr.jp より情報取得.

Borovoy, A. B. (2005). *The too-good wife: Alcohol, codependency and the politics of nurturance in postwar Japan.* Berkeley, CA: University of California Press.

Chung, J., Hara, K., Yang, C., & Ryu, J. (2003). Contemporary *Ch'i/Ki* research in East Asian countries: Implications to communication research.『異文化コミュニケーション研究』第 15 号, 41-66 頁.

Coulter, J. (1979). *The social construction of mind: Studies in ethnomethodology and linguistic philosophy.* London: Macmillan.

Damasio, A. R. (1994). *Descartes' error: Emotion, reason and the human brain.* New York: Putnam.

土居健郎（2007[1971]）．『甘えの構造』弘文堂.

藤田和生（編）（2007）．『感情科学』京都大学学術出版会.

濱野清志（1987）．「性格表現用語に使われる“気”の研究」『心理学研究』第 58 巻, 第 5 号, 295-301 頁.

濱野清志 (2003)．「気から見たトランスパーソナルな次元と個人のかかわり」『現代のエスプリ』第 435 号, 99-107 頁.

Hasada, R. (2002). "Body part" terms and emotion in Japanese. *Pragmatics & Cognition, 10,* 107-128.

石井敏・久米昭元・遠山淳（編著）（2001）．『異文化コミュニケーションの理論—新しいパラダイムを求めて』有斐閣.

前林清和・佐藤貢悦・小林寛（2000）．『〈気〉の比較文化—中国・韓国・日本』昭和堂.

Nagata, A. L. (2002). Somatic mindfulness and energetic presence in intercultural communication:

A phenomenological/hermeneutic exploration of bodymindset and emotional resonance. *Dissertation Abstracts International, 62*(12), 5999B. (UMI No. 30379689)
新村出（編）（1998）.『広辞苑』［第5版］岩波書店.
小倉紀蔵（1998）.『韓国は一個の哲学である―「理」と「気」の社会システム』講談社.
小倉紀蔵（2001）.『韓国人のしくみ―「理」と「気」で読み解く文化と社会』講談社.
小野沢精一・福永光司・山井湧（1978）.『気の思想―中国における自然観と人間観の展開』東京大学出版会.
納富信留（1999）.「自己了解としての風土―和辻風土論の批判的展開」『哲学年報』第58号，35-61頁.
野矢茂樹（2005）.『他者の声　実在の声』産業図書.
彭飛（1996）.「『気』『気配り表現』をめぐって」『日本語学』第15巻，第7号，76-83頁.
彭飛（2004）.『日本語の「配慮表現」に関する研究―中国語との比較研究における諸問題』和泉書院.
Rorty, R. (Ed.). (1967). *The linguistic turn: Recent essays in philosophical method.* Chicago: University of Chicago Press.
Rosenberger, N. R. (1992). Tree in summer, tree in winter: Movement of self in Japan. In N. R. Rosenberger (Ed.), *Japanese sense of self* (pp. 67-92). Cambridge: Cambridge University Press.
Rosenberger, N. R. (1994). Indexing hierarchy through Japanese gender relations. In J. M. Bachnik & C. J. Quinn (Eds.), *Inside and outside in Japanese self, society, and language* (pp. 88-112). Princeton, NJ: Princeton University Press.
酒井直樹（2002）.『過去の声―十八世紀日本の言説における言語の地位』（酒井直樹・監訳）以文社.［原著：Sakai, N. (1991). *Voices of the past: The status of language in eighteenth-century Japanese discourse.* Ithaca, NY: Cornell University Press］.
佐藤喜代治（1996）.『一語の辞典　気』三省堂.
杉村泰（2007）.「インターネットを利用した日本語の類義分析」『言語』第36巻，第2号，42-49頁.
竹内敏晴（1996）.「からだとことば」『岩波講座　現代社会学第4巻　身体と間身体の社会学』(99-119頁). 岩波書店.
鄭秀賢（1996）.「『気』の語句をめぐる表現の日・韓対照研究」『日本語学』第15巻，第7号，69-75頁.
土屋哲（2004）.『古層文明から21世紀を読み解く―〈気〉の比較文化誌』朝日新聞社.
浦野啓子（2005）.『「気が利く女」になれる50のルール―上司、同僚、得意先から好かれる人の共通点』ＰＨＰ研究所.
和辻哲郎（1979［1935］）.『風土』岩波書店.
山田桂子（2003）.『“かわいい女”のちょっとした気の使い方63』三笠書房.
山本七平（1997）.『「空気」の研究』文藝春秋.
湯浅泰雄（1991）.『「気」とは何か―人体が発するエネルギー』日本放送出版協会.
湯浅泰雄（1996）.「身体と間身体関係」『岩波講座　現代社会学第4巻　身体と間身体の社会学』(49-70頁). 岩波書店.